時、子供は自分自身の力で治って行きます。子供の中でたくましい力が育つのです。また、体と心は密接につながっていますから、体のほうに働きかけることによって、心の状態も変えて行くことができます。

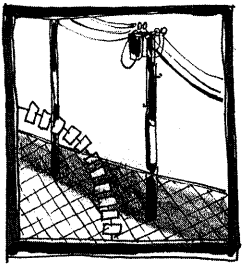
このことは大人にもいえることです。大人はもう少し子供よりも複雑で問題はいろいろ入り組んでいますが、基本的にその事の心の方向が、前向きになり、生きる勢いがつき、自分の体が治ると確信したとき、自分の力で治って行くのです。

（松が丘治療室マザーズオフィス主宰
東京シュタイナーシューレ教員）

本を直す

～本は利用され続ける文化財～

久芳　正和



〝本〟というのは、傷んだからといっても捨て難いもので、それぞれの本に特別な想い出があり愛着を感じてしまうのは、私だけなのだろうか？

おじさんと呼ばれる齢になっても、本棚の隅に置

き去りにされたボロボロになった革表紙の辞書や、色褪せた絵本があったりする。

そんな本を数十年ぶりに手に取ってみると、一瞬の内に当時の自分にもどれたりするから不思議なものだ。

多くの人たちは、大切な本が壊れて表紙がブラブラに外れそうになったり、ページが抜けたままの状態で我慢しながら使ったり、一方では応急手当にセロファンテープなどを駆使して破れたページをつなぎ合わせたり工夫している。買い替えの可能な本ならば、すぐにでも書店に注文するだろうし、それがだめなら諦めるしかない。

個人レベルならば、この様な処置で許されるのだろうが、図書館ともなるとそうも行かなくなる。まして私が仕事をしている国立国会図書館では、全ての資料を〝永久保存〟する納本図書館としての使命を担っていることもあり、資料の状態にかかわらず常に利用可能な状態にしておくことが要求されている。

本には、文字が伝える〝情報〟と紙やインクその他の材料から構成されている〝物〟という側面もある。

図書館を利用する人たちは、情報のみを必要とする人、情報プラス物、あるいは物としてのみの本を必要とする人などまちまちである。

私たち図書館資料の保存に携わる人間にとっては、それら全ての人たちの要求に可能な限り答える責任があるのだろう。とは言っても限られた人員・予算のなかで、図書約五百万冊を相手にすることは至難の技なのである。

本は利用されればされる程傷むに違いないのだろう。しかし貴重な本だからといって施錠した本箱に仕舞い込み、利用に供されなければ長持ちはしても折角の本が役立たずに死蔵してしまう。

資料の〝利用と保存〟は相反する概念として論じられることが多い。しかし、保存とは単に守るとい

う消極的な行動ではなく、現在及び将来に向けて少しでも長く人々に資料の利用を保証し続けるための前提条件であり、積極的な行動であると捉えられるべきだと思っている。

保存のための処置には、資料が傷んだり又は資料の散逸を防ぐために前もって行われる事前処置（製本）と、一時的な処置として保存箱や保存ホルダーと称される弱アルカリ性のボードで作製された容器に収納し、主に外部からの劣化要因（光・ホコリ・温湿度など）から資料を保護する段階的処置、そして損傷した後に行われる修理・修復、再製本などがある。

ここでは特に、私が日頃行っている本の修理修復について触れてみたい。

対象とする資料の多くは、十七世紀～二十世紀初頭ぐらいまでの革装丁された洋装本で、表装材料の多くは山羊又は子牛の革が使用され、その上に金箔で装丁を施された堅牢な本が多く、昨今の無線綴じ（接着剤製本）された表紙と本体とが見返紙の部分だけで接続している本と比べると製本構造上の違いには大きなものがある。

最近では、貴重な資料を修理修復する時には、〝非破壊〟〝可逆性〟〝保存記録〟という三原則がある。

①非破壊とは、資料が元々持っているオリジナルな形態・材料はもちろんのこと製本構造なども変えてはならないということ。

②可逆性とは、修理修復に当たって使用される材料あるいは処置などが、後日いつでも元の状態にもどすことが可能であるということ。

③保存記録とは、オリジナル資料の物としての記録と、処置を施した過程での詳細な作業記録（使用した材料も含む）をとるということ。

基本的には以上の事柄を念頭に置きながら作業をしている。ボロボロになった本でも、再び利用可能にするために様々な作業が行われる。虫損害に遇っ

た箇所は一つ一つの穴を和紙を用いて繕ったり、劣化して赤茶けた革を慎重に剝がし、新しい革で本を包み直した後、再びその上にオリジナルの革をもどすことにより、ある程度のオリジナル性も保つことができ、資料の利用も可能になる。

紛失している部分、例えば花ぎれ（本の背側の天と地の部分にある布片）などは、編み直したりもするが、こうした新たに創作する部分は最小限にとどめている。それは、後世の人たちに誤解を生じさせてはならないという配慮からだ。

以上のように、私たちは資料のもつオリジナリティーを最大限に尊重し、決して冒険的な無理な処置をせず、しかも利用に耐えられるような本の直し方を常に心掛けている。

形有る物は必ずいつかは消滅するのだろうが、私たちの仕事はそのいつかを一日でも先に伸ばす手助けになればと思っている。

（国立国会図書館）

おもちゃを直す

松尾　達也